様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月　５日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８７２００５０
研究課題名（和文）室町期における武家家伝・故実・家訓の創成と伝播に関する文学的研究

研究課題名（英文）A literary analysis of the creation and diffusion of samurai family traditions, practices, and precepts in the Muromachi period

研究代表者
鈴木　彰（SUZUKI　AKIRA）
明治大学・政治経済学部・准教授
研究者番号：４０２８７９４１

研究成果の概要：
国内の諸機関に所蔵されている室町期の武家家伝・故実・家伝に関する文献資料の原本を調査し、それらの記述と、『平家物語』や『太平記』といった中世の軍記物語に代表される文学作品の叙述やそこに表れた認識・価値観・歴史観等との関係性をさまざまな観点から検討した。本研究を通して、室町期の文学表現を生み出す際の基盤となる、これまでには知られていなかった武家社会の文化的環境の広がりやつながり、〈知〉のありようが見通せるようになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	１，３００，０００	０	１，３００，０００
２００７年度	８００，０００	０	８００，０００
２００８年度	８００．０００	２４０，０００	１，０４０，０００
年度			
年度			
総　計	２，９００，０００	２４０，０００	３，１４０，０００

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：中世文学

１．研究開始当初の背景

物語は、ひとたび成立した後も享受の過程で変貌し続ける。こうした実態にある軍記物語等の多くの物語がどのように読まれ、それをもとに人々がいかなる営みに及んでいたのかを通時的に把握しようとする問題意識のもとで、本研究は構想された。

研究開始当初、室町期武家の社会的・文化的実態を取りあげた研究自体が決して多くはなかった。中世文学の分野では、2009 年現在でも、いささか活性化しつつあるという程度であるといえよう。また、武家故実・家訓研究は、歴史学の成果が先行してきた。既に小澤富夫『増補改訂武家家訓・遺訓集成』（ぺりかん社　2003）という本文集成が刊行され、二木謙一氏『中世武家儀礼の研究』（吉川弘文館　1985）、桃裕行『武家家訓の研究』（思文閣出版　1988）等の研究書によって、基礎的研究も整いつつあった。しかし、家伝・故実書についてはまとまった翻刻・影印テキストも存在せず、これに刀剣伝書等の関連分野のテキストをも併せるとさらにその世界は広がることが予想された。そしておそらく、その一環に中世文学の表現も位置づけられることになるものと思われた。さらに、武家家訓については、主要本文は広く提供された

が、なおその内容を、文学環境との接点において検討するという試みは、家伝や故実の場合と同様、特記するほどの成果はなかった。
　そうした中で、〈武家の知〉をめぐる武家家伝・武家故実・武家家訓を形づくる書物群を主たる調査・分析の対象とし、かつそれらと中世文学との関係性を探ることで、新たな視座から当該期の文学的環境についての検討を試みようとした点は、第一に本研究を特徴づけるものであった。また、本研究は、この意味で先駆的なもののひとつであったとみてよいと考える。

２．研究の目的
(1)室町期社会における武家がもつ、武家としての知識と心性の内実の解明。
　室町期の武家の人々が武家としてふるまうための知識の内実や、それに基づくそれぞれの心性を照らし出す。

(2)〈武家の知〉の創成と伝播の実相解明。
　家伝（＝自家の過去を創る知）、故実（＝現代社会を生きるための知）、家訓（＝未来を導き支える知）の内容を通して、当該期の〈武家の知〉の実態を解き明かす。それぞれの伝本書誌調査と収集（紙焼き写真等）を進める。

(3)本文の提供と各種データベースの作成。
　主要伝本等について、全貌を紹介することで、多分野からの検討を踏まえた議論ための基盤を構築することを目指す。

(4)室町期の文学的実態との関係性の解明。
　特に「武」を扱う室町文学（軍記物語・お伽草子等）が、〈武家の知〉との関係の中で新たに創出され、改変されていく動きをとらえる。

３．研究の方法
(1)武家家伝・故実・家訓の伝本調査
　諸機関を訪問して関連文献の原本調査を行い、そこで得られた情報を集積していく。集められたデータは目録化することを意識しながら整理していく。
(2)関連作品の伝本調査
　武家家伝・故実・家訓とつながりのある文学作品を調査する。軍記物語やお伽草子は中心的な対象とする。必要に応じて、紙焼写真、コピー、原本の撮影等の方法で手元に置くようにし、検討のための基礎資料とする。
(3)関連資料・記録データの集積
　武家家伝・故実・家訓に関する記録・記事を諸文献から抽出する。
(4)資料分析の推進、研究成果の発表
　(1)～(3)によって集積した資料・情報をもとに、目的に沿った分析を進める。随時、成果を論文の形で公表する。

４．研究成果
(1)武家家伝・故実・家訓関係の伝本調査の成果
　2006 年度には名古屋市蓬左文庫・八戸市立図書館・山口県文書館・彦根城博物館等で、2007 年度には彦根城博物館・鹿児島大学付属図書館・萩市立図書館等で、2008 年度には鹿児島大学図書館・鹿児島県歴史資料センター黎明館・名古屋市蓬左文庫等でそれぞれ調査を行い、室町期の武家故実を担った伊勢氏・小笠原氏に関する資料、毛利家・島津家・井伊家といった武家に伝えられた家伝・故実・家訓に関わる資料を閲覧し、許可がおりたものについては写真で撮影した。この過程で、これまでには本格的な研究のなされていない資料群もいくつか見出されたことは大きな成果であった。それらの分析によって、当該分野に関してこれまでには明らかにされていなかった観点からの研究が進展することが期待できる。現在、その整理と分析を進めている最中であり、継続的に調査を行いつつ、本研究の成果と意義を公表していくつもりである。

(2)関連文学作品の伝本調査
　上記の調査と並行して、武家家伝・故実・家訓とかかわる文学作品のなかの記事や言説を収集するために必要となる伝本調査を行った。原本はもとより、活字化されたテキスト・影印本等を適宜活用した。2006 年度は『平家物語』や『太平記』の主要伝本を、2007 年度は『源平盛衰記』や室町軍記・お伽草子を、2008 年度には戦国軍記をそれぞれ中心に据えて作業に当たった。
　この過程で得られた記事・言説の性格について検討する作業も少しずつ進め、見通しのついたものについては論文の形で公表した。また、未発表の内容については、今後の継続的な検討を踏まえて、随時発表していくこととしたい。

(3)関連資料・記録の集積
　武家家伝・故実・家訓に関わる記事は、文学作品だけではなく、多様な室町期の文献のなかに表れている。とくに日記・記録類に見いだせるものについて、当該記事の抜き出し作業を行った。対象が膨大であるため、この作業は他の作業に比べて多くの課題が残ることとなったのは遺憾である。とはいえ、武

家故実・家伝・家訓にかかわる実態を窺わせる多くの関連記事を見いだすことができたことは成果としてよいと思われる。今後、それらを当該分野の分析に応用しながら、成果をまとめ直していきたい。

(4)資料分析の具体的成果

上記のような作業とそれらを経て集められた資料・情報を総合した分析を通して得られた知見のうち、期間内に公表し得たものについての概要は次の通りである（それぞれ、「５、主な発表論文等」に対応する形で示す。矢印で該当論文を指示)。

①『平家物語』のなかで老武者として討死を遂げる斎藤別当実盛の姿が、中世・近世の人々にどのように受け止められてきたかを検討した。その結果、実盛の姿を武士の手本とみなし、それを自らの行動規範とせよという言説が次々と生み出されていた様子、またそれらが故実・家訓として受け継がれていく様子が明らかとなった。本論文で分析対象としたのは実盛の姿だけであるが、同様の図式は他の人物に関しても発生しうるものであり、また物語が描く人物像が、現実社会の人々の規範として読みかえられていく様相とあわせて、普遍的な問題を内在しているものと考えられる。その典型的な事例として、実盛像を扱った。→〔雑誌論文〕(1)

②鎌倉時代の帝王後鳥羽院は多芸・多才な人であったようだが、そのうち「武」と関わる側面として、刀剣・鍛冶との関わりを示す伝承がある。「番鍛冶」に代表されるそうした伝承は、『承久記』や『太平記』等の軍記物語をはじめとして、とくに刀剣伝書の世界をとおして幅広い展開をみせる。数多くの異説を生み出しつつ進行するその様相を整理し、武家故実と関わる刀剣伝書の世界と文学とくに軍記物語の世界とが連関し、共鳴していく様相を照らし出すことができた。軍記物語の改作の背景となる知的事情のひとつについて、具体的に跡づけることができたと考える。→〔図書〕(1)

③後醍醐天皇がどのように語り継がれたかという観点から、前近代の後醍醐評の変遷とその事情を掘りさげた。とくに、本研究課題とかかわるのは『太平記』の事例である。幕府打倒を目指した帝王の先例として後鳥羽院の位置が措定され、それとの類比の中で後醍醐が位置づけられる。そしてその際に、後鳥羽院ゆかりの太刀が両者を結びつけるような形で叙述が改変されていく事例が認められるのである。②で扱った後鳥羽院論とも連関するが、武家社会のなかでの故実を構成する刀剣に関する知識が、こうした改変の基底を支えていると考えられる。武家故実と軍記物語とのつながりは、こうした部分からも透かし見えてくるのである。→〔図書〕(2)

④平安時代末、壇ノ浦の戦いにおいて海中に没した平家一門の怨念は、こののち同地に生息する蟹の甲面に怒りの表情となって表れているという伝説が残る。それを体現する平家蟹という生きものの伝承を追った論考のなかで、とくに本研究課題と関わる問題として、戦国末期から近世初期にかけて、『後太平記』『塵塚物語』等において、足利義満が平家蟹を供養したという説話が語り出されていることに注目した。そこには、「源氏将軍」という権力者が平家一門を追悼すべき存在として認識されている様子が看取できる。平家蟹に関する記事が室町期の武家家伝・故実書・家訓のなかにそのまま登場することはないようだが、こうした伝承自体が源氏将軍のありかたとの関わりで、武家の人々の〈知〉とつながり、その価値観を規定していく様相を読み取ることができる。家伝・故実・家訓の書という枠をこえて分析の対象を広げる必要があることを確認することができた。なお、『後太平記』『塵塚物語』が記す平家蟹説話の問題は、『平家物語』の受容という観点を踏まえてからあらためてその故実的な意義を問う必要があると考えている。それについては、現在別の論文を用意しているところである。→〔図書〕(3)

⑤『太平記』のなかに現れる源家重代の太刀「鬼切・鬼丸」という二振りの太刀は、源家の家伝・故実と深く関わる存在として、中世社会での認知度を得ていた。『太平記』諸本を見渡すとき、これらの太刀に関する記事が増補・改編されるという動きが認められるが、検討の結果、そこには刀剣伝書から窺われるような重代の太刀をめぐる価値観が投影していることがわかった。また、これを北条家の重代の品とする理解が実社会で利用される事例も認められ、伝承と室町期の社会生活とのつながりも認められた。『太平記』や刀剣伝書の世界が、同時代の特定の武家と結びついた伝承との関わりで揺れ動き、そのはざまに新たな創造力が生み出されている様相のひとつを説き明かすことができた。→〔図書〕(4)

⑥仮名本『曽我物語』には、「髭切・友切」という二振りの源家重代の太刀が描き込ま

れている。これらは、増補の過程で加えられたものであるが、それによってどのような変貌を遂げたのか、またそうした改編を可能にした背景を探ることを試みた。検討の結果、二振りの重代の太刀が頼朝のもとに集まることの象徴的な意味が明らかとなり、そうした流れを生み出す背景として、「剣巻」や刀剣伝書にもみられるような、権威者を語るための様式的な語り方があったことが浮かび上がってきた。⑤で取りあげた事例と併せて、室町期の武家社会で実際に取り沙汰された源家重代の太刀の由来に関わる物語が、文学作品の享受・改作の場とも隣接していたことが具体例をもって明らかとなったといえよう。→〔図書〕(5)

以上は期間内に公表し得た内容であるが、これらの他にも、おもに『源平盛衰記』や戦国軍記の記述のなかに、故実・家訓に関わるいくつかの注目点を見出している。それらについては引きつづき検討を進め、順次、本研究課題の成果として公表していくことを予定している。

(5)今後の課題と展望

以上を踏まえ、ここまでに記しきれなかった事柄を中心に、今後の課題と展望をまとめておく。

①本文資料の提供

期間中には、基礎的な本文を翻刻・影印等の形で紹介し、広くその意義を共有することができなかった（このことは、計画当初から、期間内での実現は困難であろうと想定していたので、先の課題として設定していた）。本研究をとおして、学会に未紹介のものを含めた重要な伝本をいくつか見出し得たので、それらについては資料紹介と内容分析を併せる形で公表する機会を模索していこうと考えている。

②兵法関係資料の検討

検討の過程で、さまざまな地域の武家家伝・故実と中世以来の兵法関係の知識とが渾然一体となっている様相に接した。いうまでもなく、室町期以降の軍記物語やお伽草子には兵法関係の記事・物語も数多く現れており、そうした意味でも、視野を広げた調査・検討が求められることを痛感している。家伝や故実・家訓の担い手・伝播者の活動を、収集し得た資料類から推察するとき、さまざまな〈知〉の融合が起こっていたことが想定される。引きつづき、収集した資料の読み込みを続け、兵法関係資料への視野を意識しながら、問題の意識の軸を立て直すことにしたい。

③資料調査の継続

調査やその準備の過程で、計画当初に想定していた以上の資料と出会うこととなった。結果として、本研究の奥行きが増すことにはなったが、残念ながら時間的にも予算的にも、それらを悉皆調査することはできなかった。現在把握しているこれらの〈未調査資料群〉を視野に入れる必要があるのはもちろんであり、期間終了後も調査をできる限り継続していくつもりである。

ここまでに示してきた諸課題を勘案しつつ、あらためて次年度の科学研究費に応募することを期している。2009 年度はそのための充電期間として位置づけ、情報や資料の整理を進めることにしている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

(1)鈴木彰「斎藤別当実盛の選択――老武者の恥辱と武勇――」「神奈川大学評論」第 55 号　査読無　56 頁～64 頁　2006

〔図書〕（計６件）

(1) 鈴木彰・樋口州男編『後鳥羽院のすべて』新人物往来社　2009　182 頁～202 頁　鈴木彰「後鳥羽院像の展開――刀剣文化との関わりから」

(2) 櫻井彦・樋口州男・錦昭江編『足利尊氏のすべて』新人物往来社　2008　192 頁～211 頁　鈴木彰「前近代における足利尊氏評価の変遷」

(3) 説話と説話文学の会編『説話論集　第十七集』（清文堂出版）　2008　465 頁～505 頁　鈴木彰「平家蟹と壇ノ浦――旅人たちの見聞をめぐって――」

(4) 関西軍記物語研究会編『軍記物語の窓第三集』　和泉書院　2007　233 頁～252 頁　鈴木彰「曾我兄弟所持の太刀と『曾我物語』――仮名本の流布と再生――」

(5) 佐藤和彦編『中世の内乱と社会』東京堂出版　2007　490 頁～510 頁　鈴木彰「鬼丸・

鬼切説の展開と『太平記』」

(6) 武久堅編『中世軍記の展望台』和泉書院 2006　313 頁～328 頁　鈴木彰「源家重代の太刀と曾我兄弟・源頼朝――『曾我物語』のなかの「鬚切」「友切」――」

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
なし。

６．研究組織
(1)研究代表者
　鈴木　彰（SUZUKI AKIRA）
　明治大学・政治経済学部・准教授
　研究者番号：４０２８７９４１

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし